

発想と工夫で生きていく

「じょうぶな頭とかしこい体になるために」という本を書いたのは、もう約30年前。世間一般で良しとされる「丈夫な体」と「賢い頭」は、何にでも耐えてしまふ体となってしまう体で、教科書通り対応できる頭という意味でしょ。でも生きるために必要なのは、考えるべき時に自分で考えられる「丈夫な頭」と何か違うだ。

にはいたくないと自分の状態に反応できる「賢い体」だよね。

本来この「丈夫な頭」と「賢い

体」を育むはずの子どもたちが、味を持つても、時間がきたらい

今初等教育の中で対応型の頭と体になるのは当たり前。何の必然もなく考えさせられ、たまたま興味を持って、時間がきたらい



絵本作家 五味太郎さん

ごみ・たろう 1945年東京都生まれ。代表作に「きんぎょがにげた」「仔牛の春」など。コロナ禍で、91年刊行の「じょうぶな頭とかしこい体になるために」が話題に。子どもの学びについての著書に「大人問題」「勉強しなければいいじょうぶ」。

花まる学習会代表 高浜正伸さん



これからは「めちゃくちゃ変化する世界」になります。そこで生き残るために教育は、意外と本質的なものではないでしょうか。つまり、考える力と「考えた」とことを重視する力を身に付ける、そして、体験経験を増やすということです。どれだけ遊んでけんかをしたか、障害のある人や外国人の人と出

会つたか。挫折も含めた多様で豊かな経験が足りないと大人になつた時、苦手に感じたり、乗り越えられなかつたりしてしまう。い

つて、体験経験を取る」という従来の考え方では、コロナ禍のような事態

たかはま・まさのぶ 1959年熊本県生まれ。幼児から中学生までの学習塾「花まる学習会」代表。3浪して東京大に入学、90年に同大学院修士課程修了。思考力や野外体験を重視する独特的の教育理念や学習法で注目される。算数オリンピック作問委員も務める。

にに対応できない。知識を蓄えて正しい答えを出すのは今後、人工智能(AI)がやってくれます。そうではなく、働く頭をつくるのが大事。

そして、生き方は自分で決めなくてはいけません。自分の「好き」を大事にし、それで飯を食つためには必要かを考える。それには「哲学」が必要ですが、何にでも

効率を求める風潮の今はその時

間がありません。

シリニンバレーで大成功した人の共通点は高校、大学で「不良」だったというところらしい。周りの言ふことが絶対とは思わず、従わない。学校に行かず街でフランフランしながら、自分のペースを取り戻し、世界を自分の言葉で語り直す。正解なき人生で誰の笑顔を一番大切にするかを考えたのではないか

でしょうか。

実際に食べていくには実力を付けなければいけません。しかし、まずは自分の頭で「どことん考え方」で「やっぱりこれがやりたい」というビジョンを明確に持つことが大事です。コロナ禍は「不良」でないにも、「当たり前」を疑う哲学の機会を与えてくれたのではな

終わり。次は理科、歴史、音楽で、

帰ったら宿題。次々とえられるものに一生懸命対応し続ける。それが考えたことだと思ってしまうよ。

さまざまな知見や意見を得て、さまざまな価値観を一方的に押し付けるなんて、基本的人権の侵害だよな。

さだ。自分が考え、自分で工夫すればいいじょうぶ」。

コロナ禍の一斉休校で大騒ぎになつたけど、学校って本当に充実していたの? 元通りになつてしまつていい本当? それにしても、まだ学歴社会が続していくのかなあ?

平時から、違和感には敏感でいてほしいな。人間つき、強い目的を持って生まれてきたわけでもないし、生きながら試行錯誤する生物なんだ。不安定、不安心なん当たり前だよね。免疫力は体だけじゃなく、精神にも大事なんだつて、頭に入れておいてほしいなあ。

知識にすぎないよ。

自分の発想と工夫で生きていくしかない。手段はいろいろあるはずだ。自分が考え、自分で工夫すればいいじょうぶ」。

当たり前疑う哲学の機会

（次回は9日に掲載）